特定非営利活動法人
日本ハンザキ研究所

会誌 あんこう

第２３号 令和元年９月発行

栃本武良先生追悼集

ハンザキと共

目　次

巻　頭　言――――　NPO 法人日本ハンザキ研究所　理事長　岡田　純

栃本先生を偲ぶ会

経歴とエピソードご紹介　――――――――――――――――　事務局　1

思い出の写真　――――――――――――――――――――――――――――――　3

お別れの言葉　――――　日本オオサンショウウオの会　桑原　一司　4

栃本先生への追悼集に寄せて

――――――――　NPO 法人日本ハンザキ研究所　理事長　岡田　純　5

――――――――――――――――――――――　事務局員　岡田　りょうが　6

――――――――――――――――――――――　姫路市立水族館　清水　邦一　7

――――――――――――――――――――――　川崎医科大学　西松　伸一郎　10

――――――――――――――――――　元但馬国府・国分寺館長　加賀見　省一　10

――――――――　元兵庫県立人と自然の博物館：主任研究員　山内　健生　10

――――――――――　日本オオサンショウウオの会　事務局長　清水　善吉　12

――――――――――――――――――――　前 名張市教育委員会　川内　彬宏　12

――――――――――――――――――――――　島根県立宍道湖自然館　寺岡誠二　13

――――――――――――――――――　神戸市立須磨海浜水族園　東口　信行　13

――――――――――――――――――――――――――　東京水産大学卒　林　栄一　14

――――――――――――――――――――――――――――――　会　員　宇那木　隆　14

――――――――――――――――――――――――――――――　会　員　杉本　征之進　15

――――――――――――――――――――――――――――――　会　員　高橋　瑞樹　15

――――――――――――――――――――――――――――――　会　員　笹田　直樹　16

――――――――――――――――――――――　会　員　作本　京子 Andrew Innes　16

――――――――――――――――――――――――――――――　会　員　仲川　希良　17

――――――――――――――――――――――――――――――　会　員　斉藤　敬子　17

――――――――――――――――――――――――――――――　副理事長　黒田　哲郎　18

――――――――――――――――――――――――――――――　理　事　中島　悟　19

――――――――――――――――――――――――――――――　理　事　鞍田　悦子　19

――――――――――――――――――――――――――――――　理　事　竹村　幸男　19

――――――――――――――――――――――――――――――　理　事　田口　勇輝　19

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局長　奥藤　修　21

――――――――――――――――――――――――――――――　副事務局長　池上　優一　21

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局員　山崎　寛子　23

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局員　増子　善昭　24

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局員　増子　裕子　24

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局員　小林　弘幸　25

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局員　近藤　宏　25

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局員　吉賀　一弘　26

――――――――――――――――――――――――――――――　事務局員　黒田　真澄　26

編集後記――――――　編集長　増子　善昭

巻　頭　言

日本ハンザキ研究所は、栃本先生が築いてこられた研究をベースに 100 年 200 年とハンザキのモニタリングを続けられる、そして新たな研究や教育普及啓発、生息地保全、地域の活性化を担う拠点施設を目指していきます。そのためにはNPO法人として経営基盤の改善・強化が喫緊の課題ですが、黒川の自然を通してハンザキとそれを育む環境を大切にしていく人の輪を作り、世代を超えて愛されるハンザキ研を作っていきたいと思います。

令和元年 7 月 21 日に当研究所で行われました栃本先生を偲ぶ会にはご遺族を始め、大勢の会員や関係者の皆様にご参加いただきました。お陰様で泣いたり笑ったりの素晴らしい偲ぶ会となりました。ご参加いただきました皆様、お花やメッセージを送っていただいた皆様に心より御礼申し上げます。

会誌あんこう第 23 号は、栃本武良先生追悼集です。会員の皆様や栃本先生と縁のある皆様から寄稿していただきました。栃本先生との思い出や各々の特別な思いが綴られています。本号を通し、今一度栃本先生を偲んでいただければと思います。栃本先生にまつわるエピソードをお持ちの方は、会誌「あんこう」にぜひ投稿してください。お待ちしています。

栃本先生の逝去に伴い当研究所は大きな節目を迎えています。引き続き会員の皆様のご支援ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

令和元年 9 月

NPO 法人　日本ハンザキ研究所

理事長　岡田　純

栃本先生を偲ぶ会　2019. 7. 21.

経歴とエピソード紹介

事務局

栃本先生は昭和 16 年 2 月、東京都三鷹市のお生まれです。

昭和 38 年に東京水産大学を卒業されたのち、中高一貫の男子校・芝学園に、生物科教諭としてお勤めになりました。教師生活はわずか 2 年間ではありましたが、平成 20 年には、この時に顧問をしておられた生物部の教え子の皆さんが、「還暦になりました。」と研究所を訪ねてこられるということがございました。更にその 10 年後に来られた際には、「林間学校のお風呂に入っていると、栃本先生がど真ん中に飛び込んでこられ、みんなお湯を被って大迷惑だったことが未だに忘れられないよ」と笑いながら言っておられました。50 年以上たってなお慕われる、ユニークで印象深い先生だったことがしのばれます。

昭和 40 年には姫路市立水族館の設立準備室に着任され、41 年の開館に向け尽力されました。その飼育・展示などの仕事のかたわら、昭和 50 年にはオオサンショウウオの生態調査を、この黒川で始められました。当初、厳冬期の調査時には気温がマイナス 20℃を下回っていたともお聞きしました。

先生は運転免許をお持ちではないので、日本ハンザキ研究所を設立するまでの 30 年間、調査道具一式を抱えて、電車とバスを乗り継いで、黒川に通われました。今や住民が 50 人弱しかいない黒川のアコバスは、ここ十数年の乗車回数チャンピオンである栃本先生によって路線が維持されていたと言っても過言ではないでしょう。その当時からの努力によって個体登録されたオオサンショウウオは、今日現在で 1,714 個体を数えます。

その後、平成 6 年には姫路市立水族館の館長となられ、平成 13 年には島根県立宍道湖自然館の館長も兼任されました。

そして退職後の平成 17 年 8 月、たった一人でこの地に日本ハンザキ研究所を設立され、ここのヌシとして、オオサンショウウオの調査、研究、保護に精力的に取り組んでこられました。その調査研究を後世に引き継いでもらえるようにと、平成 20 年 8 月に NPO 法人日本ハンザキ研究所を設立し、大勢のスタッフと共に活動を続けてこられました。

そんな栃本先生ですが、平成 23 年頃、夜の川に一人で調査に行かれ、足元のオオサンショウウオばかりに気を取られていたせいか、自分がどこにいるかが分からなくなり、川で迷われたということがありました。それがきっかけで、「僕ももう齢だからね。」と一人での調査は止められましたが、栃本先生と言えばビールが主食で、朝・昼・晩と毎食 1 リットルを規則正しく飲むことが自慢でしたので、この時もそれなりに飲んでいらしたせいではないか、と思っています。ちなみに一年分の空き缶をトラックに満載してリサイクル業者に持っていったところ、一万数千円になったというエピソードもありました。

それでも、さすがに平成 29 年 1 月の吐血の後にはドクターストップがかかり、それ以来、本当に一滴のアルコールも口にされませんでした。それだけ、まだおやりになりたい仕事があったということなのだと思います。

栃本先生の最後のご様子ですが、4 月の末頃に体調を崩され、高熱も出ていたようですが、「風邪だから大丈夫」と研究所での毎日の作業をこなしておられました。しかし、5 月に入っても高熱が続き、食事も取れず寝込まれるような状態になりました。顔を見たスタッフも病院に行くよう申し上げたのですが、やっと 12 日になって姫路のご自宅にお帰りになり、緊急入院となりました。身体が衰弱しきっているとのことで、お見舞いもかなわず、私どもも心配しておりましたが、23 日頃に「起き上がって食事

が取れるようになりました」とのご連絡をいただき、安堵しておりました。
26 日には総会が控えておりましたので、これを無事に務め上げ、落ち着いたらお見舞いに伺う予定にしておりました。しかし、28 日に容体が急変し、お亡くなりになられたとの知らせをうけ、突然のことに言葉も出ませんでした。
　研究所では、いつも座っておられた事務所の机は今もそのままで、全く実感が無く、今にもにこやかな笑顔で出てきてくださるのでは、と思ってしまいます。

　生き物とフィールドをこよなく愛された先生でした。きっと皆さまもそれぞれに、先生との思い出をお持ちだろうと思います。
この式典の後の二次会では、皆さまでご歓談いただき、思い出を分かち合っていただければと思います。

大勢の皆さまに集っていただきました

思い出の写真も笑顔で溢れています

事務所の机は今もそのままで

祭壇は研究所内の樹木や草花で飾り付け、先生らしくお見送りしました

メッセージも沢山
お寄せいただきました

思い出の写真

2007.8.11　市川上流での調査

2009.1.17　新年会で　とにかくビールがお好きでした

2016.10.10　お気に入りの撮影スポットで
（産経新聞社提供）

2008.4.19　NPO 法人日本ハンザキ研究所設立総会

2010.6.9　海外からの視察にも対応

2015.9.26　夜間観察会

2013.10.18　繁殖期の調査

2014.7.25　研究所裏山でのキノコ調査

2014.7.25　本の出版を記念して

栃本武良先生、お別れの言葉

日本オオサンショウウオの会　会長　桑原一司
会員一同

栃本先生、あなたはなぜ、こんな大事な時期に逝ってしまわれたのでしょうか。豪雨による流失の問題、チュウゴクオオサンショウウオによる交雑の問題、各地の堰堤下での痩せ問題が生じ、皆が力を合わせてオオサンショウウオの保全に立ち向かわなければならない時に、大切な栃本先生を失うなんて、残念でなりません。オオサンショウウオたちもその無念さに涙を流し、先生のご逝去を悲しんでいることでしょう。

そんな言葉にも、先生はきっと、「それは君たちがいるから大丈夫だよと」と優しく微笑み、私たちを励ましてくれることでしょう。栃本先生の偉大さの一つは、たくさんの後輩を育てたことでした。ここに集まったものを初め、たくさんの後輩が先生のご指導を受け、お世話になり、オオサンショウウオの研究者や保全活動家やオオサンショウウオを見つめる者になりました。

「日本オオサンショウウオの会」のきっかけを作ってくれたのも栃本先生でした。日本動物園水族館協会種保存委員会のオオサンショウウオ繁殖検討委員会を、黒川の魚ケ滝荘で持った時のことです。栃本先生から、オオサンショウウオの研究や保護に関心がある人が集まれる場を作らないかとの提案をいただき、それが 2004 年に「オオサンショウウオの会」創立のきっかけになったことを鮮明に記憶しています。

その後 2008 年に、先生は「日本ハンザキ研究所」を設立し、朝来市のみならず、全国のオオサンショウウオ研究と保護の中心を担っていかれました。雪深いこの地に、オオサンショウウオを友として住み、自然を語り、オオサンショウウオを発信し、人とハンザキの文化を育て、偉大な人生を閉じられました。

「日本オオサンショウウオの会」では、創立当初より副会長、会長、事務局長を歴任、強い信念のもとに当会を引っ張っていただき、本当にありがとうございました。これからは、直接にご指導をいただくことがかなわないのは残念でありますが、残されたもの一同、ハンザキ研究の継承を願われた栃本先生の意志を受け継ぎ、ハンザキ研究所を盛り立て、未来社会にオオサンショウウオを健やかに引き渡すための事業を進めることを誓うとともに、栃本先生のご指導に心よりの感謝の言葉を添えて、お別れの言葉といたします。栃本先生、本当にありがとうございました。一同、オオサンショウウオとともに頑張りますので、心安らかにお眠りください。

お別れの言葉

日本オオサンショウウオの会でのお二人
2015.10.3　宇陀大会で

栃本先生への追悼集に寄せて

ハンザキをこよなく愛した栃本先生

NPO 法人日本ハンザキ研究所　理事長
岡田 純

栃本先生との出会いは、1994 年の日本爬虫両棲類学会京都大会の時で、先生は首切り死体の発見等からハンザキが繁殖期の闘争で噛み合って死亡するらしいという新知見を発表され、とても衝撃を受けました。そして先生は秘蔵のハンザキビデオを学会に持参され、昼休みにお弁当を食べながらその動画を見るのが恒例行事となっていました。そのハンザキビデオを見た学会参加者から「ハンザキすげぇな」という声と共に「でもアンタッチャブルだから」という声がどこからともなく聞こえてきました。ハンザキは魅力的だけど特別天然記念物だから研究対象にならない遠い存在（水族館や動物園が研究するもの）と当時の爬虫両棲類の専門家の多くは私も含めて考えていたと思います。

そんな中、栃本先生はお一人で（後に姫路市立水族館の後輩清水邦一さんと共に）ハンザキの研究成果を学会で発表され続け、水族館で広く市民にハンザキの関心を高めるだけでなく、ハンザキの調査研究を志す者には懇切丁寧に指導をされていました。先生がハンザキ研究の裾野を広げることに尽力された功績は本当に計り知れません。

私が広島でハンザキの研究を始めた時も、鳥取で研究につまずいた時も、ハンザキ研に加わって調査を始めてからも、理事長を拝命してからも、先生は未熟な私をいつも励まし、「大いに頑張って」、「やってみないと分からないよ」といつも応援してくださいました。

日本オオサンショウウオの会発足のきっかけとなったオオサンショウウオ繁殖検討委員会（日本動物園水族館協会種保全委員会）が黒川で行われた時、「岡田さんオブザーバーで来ない？」と呼んでいただきました。実際には自分の研究発表の場を設けてもらい、関係者の皆さんとの新しい繋がりができました。栃本先生の後身に対する面倒見の良さ、そして何よりも生き物が好きで、ハンザキの研究に打ち込む姿は、人の心を引きつけ、多く人が先生の指導や影響を受けて育っていったことと思います。

栃本先生はハンザキの生態・生活史の解明に 43 年に渡り取り組んでこられました。そして膨大なデータの収集とそのデータ整理能力の高さは驚きに値するものです。38 年も同一個体のハンザキを追跡した研究例はオオサンショウウオのみならず両生類においても世界的にもほとんどなく、先生の調査法の開発やデータ管理方法がいかに優れていたかを示しています。先生はこうして長年蓄積してきた貴重なデータも調査フィールドも大いに使って研究を進めて欲しいと言われていました。そして 100 年以上も生きるかもしれないハンザキの生態解明には研究を次の世代にバトンタッチする必要があるのだと。研究者はデータをプロテクトしがちですが、私は先生のように懐の深い、ハンザキのように大らかな研究者を他に知りません。

栃本先生は、水族館退職後、ハンザキのパラダイスである黒川小中学校跡地で日本ハンザキ研究所を設立されました。栃本先生は、ハンザキの裾野をさらに広げるために誰でもハンザキについて見たり聞いたり学ぶことができる施設を作られました。ハンザキ研は、NPO 法人化を経て研究者や愛好者、栃本先生の理念に賛同する人たちが集り活動を発展させ、ハンザキは身近な存在へと変わりつつあります。

私たちは栃本先生からハンザキ研という素晴らしい遺産を受け継ぎました。そして今後も調査研究をベースに環境教育などに活用しながら、黒川の自然環境を保全し、さらに地域の活性化

を担うことのできる拠点施設としてさらに発展させていきたいと思います。栃本先生これまでご指導いただき本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。

2003 年に黒川で行われた日本動物園水族館協会（日動水）種保存委員会オオサンショウウオ繁殖検討委員会参加者を案内する栃本先生
これがきっかけとなって日本オオサンショウウオの会が発足

とち本先生へ

日本ハンザキ研究所　事務局員
岡田りょうが

ハンザキのおもしろいところや生きもののことをたくさんおしえてくれてありがとうございました。てんごくでだいすきなビールをのみながらたのしいことをしてください。

日中の川での個体発見は誰よりも早く
調査の手伝いも手慣れたもの。

研究所でのボランティア作業でも大活躍
様々な貢献が認められ、今期より事務局員として
活動していきます。

栃本さんと私

姫路市立水族館　清水邦一

出会い

ちょうど 30 年前、水産学科の学生だった私は、どうしても水族館で働きたくて、姫路市立水族館に門前払いを覚悟で押し売り実習に行きました。その時に話を聞き、ガイダンスをしてくれたのが栃本さんでした。めでたく実習できることになった私に、惜しげも無く飼育係としての考え方や、見せ方の工夫などを教えて下さいました。「本当に水族館で働きたいなら、とにかく今の勉強を一生懸命にやりなさい」と言われたのを思い出します。それから、ほどなく採用、水族館へ配属されました。当時栃本さんは副館長で、担当の飼育物もなく、渉外や広報やらデータの整理やら統括的な仕事をされていました。すでにオオサンショウウオの研究をライフワークに掲げ、日常業務の合間に、月 1-2 回くらいのペースで生野へ調査に出かけていました。私はすぐに調査に同行するようになりました。栃本さんは、車の免許をお持ちでなかったので、私は当初手頃な運転手兼助手くらいの感じで同行していました。調査は、昼ごろ姫路を出発し、明るいうちに踏査する範囲を見回り、安全を確認します。当時の主なフィールドは魚ヶ滝が中心で、時折滝谷という小さな支流まで行きました。シーンとした真っ暗な川をガスランプの明かりを頼りに歩きます。発見個体は捕獲後、測定や傷の有無を確認し、各部の写真を撮って放流。これを繰り返します。慣れないうちは、背負子を抱えての危険な夜の川歩きは本当に大変で、栃本さんについていくだけで必死だったのを覚えています。

オオサンショウウオの夜間調査

人工巣穴を設置した 1994 年以降は、主なフィールドを簾野に移し、調査前には民宿こうちゃんで一杯引っ掛けてほろ酔いで調査に出るのがルーチンとなりました。（もう時効ですよね）

せっかくの人工巣穴が大雨で流され、がっかりしながらも原因を探っている栃本さん（1998）

特に 5 月は出現個体も多く、明け方までかかることもあり、本当にヘトヘトになります。幸い個体数が少なく早く川から上がった時は、結局一杯やることになるので、必ずヘトヘトかヘロヘロになるのです。

当時は、防水の LED ライトや防水デジカメ、マイクロチップもこの世に無く、ガスランプの燃料やカメラのフィルムなど、とにかく荷物も多く、大変だったので、使えそうな新製品が出るたびに色々と試していました。「人間は楽をしたいと思う心がないと、進歩しない」とよく笑っていました。調査道具も毎回のように工夫や改良を繰り返していました。最高傑作は「保定袋」です。おとなしくなる上、四肢の確認、総排出口の隆起も楽に確認できる、調査に無くてはならないひみつ道具です。そのうち私も捕獲や保定など調査に慣れてくると、余裕もでき

夜間調査の様子（右が記録をとる栃本さん）

毎回楽しく一緒に川を歩いたものです。以降栃本さんが水族館を引退されるまで、調査に同行しました。

格言・名言・迷言（？）

よく行き帰りの車中や一杯引っ掛け中に、過去の失敗談などを面白おかしく語ってくれました。1975 年に文化庁の委託事業としてオオサンショウウオの調査を始めるまで、栃本さんはアユモドキの繁殖に注力されていたそうです。どうも天然記念物にご縁があるようです。なんでオオサンショウウオをライフワークにしたんですか？と聞いたことがあります。すると、なんと当時の上司が口を挟んでこなかった生き物だったからということです。なんとも人間味あふれる理由ではないですか。とにかく人からどうこう言われるのがお嫌いだったようで、私達部下にも自由奔放にさせてくれる良い上司でした。

マスコミの取材に熱心に答える栃本さん(2002)

オオサンショウウオの調査を始めた当時は、両生類なので冬は冬眠するものと思われていて、「真冬に（川底を）歩いているのを発見したときは大変驚いた」「またそれが、体温が 0℃でさらに驚いた」と言われてました。当時は、クサガメも土の中で冬眠すると図鑑にあったそうで、よく「図鑑なんてものは鵜呑みにしちゃ駄目だよ」とよく言われていました。

また、調査を始めてすぐの頃は、再捕獲を防ぐため、調査範囲の個体を全て一箇所に集めてから、計測などを行っていたらしいのですが、急に川が増水したため､慌てて避難したものの、カゴに集めていたオオサンショウウオは増水した川に取り残され、呼吸もできないまま一晩中水に浸かっていたとのことで、きっと死んでしまっただろう･･･と水が引いてから回収に行くと､全て生きていたと言う事があったそうです。「きっと十分な溶存酸素があれば、皮膚呼吸だけで何時間も耐えられるんだよ」と実体験に基づいた話をよく聞かせてもらいました。フィールドに出かけるたびに自らの目で新しい真理を発見すると言う楽しみを、後進に伝えたかったのだと思います。

また、極度のコレクターでもあった栃本さんは、とにかく何でも集めてきて乾燥標本か液浸標本にしていました。はっきり言って他人が見たらただのゴミにしか見えませんが、これが、記録とともに置いておくと貴重な財産になる（こともある）のです。ただ、ラベリングが個性的過ぎる書体のため解読不能なのがとてもお茶目です(笑)。読めない字があり、何て書かかれたのか聴きにいくと決まって「前後の文章から判断できるだろ？」と言われました。(…前後の文も読めないというオチです。)

日頃から「オオサンショウウオの専門家である前に、水生生物の専門家だろ。水族館の飼育係なら何でも興味を持たないと」とよく口癖の

調査中を終えて(2002) オオサンショウウオの写真は多いが、このような写真は貴重

ように言われてました。まず「疑問を持つ」こと、「判らなければ調べる」ことの２つを常に実行されていました。

また、プライベートでは娘さんのお話を時折される程度で、あまりご家族のお話はされませんでしたが、お孫さんができてからは、よくお孫さんの話をされるようになりました。やはり、ご家族はいつも気にかけられていたようです。ビールが主食というのは、皆さんよく知るところではありますが、山椒や柚子胡椒など、薬味も大好物でした。また、「食べてみて初めてその生き物を知ったと言えるんだよ」と珍味と呼ばれるものはなんでもお好きなようでした。当然オオサ…いや、止めておきましょう。

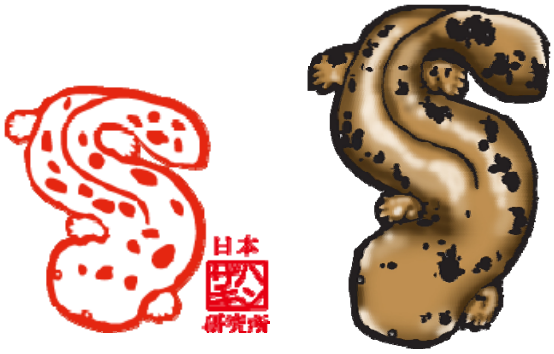
子どもにスズメバチの巣を説明してくれる栃本さん（2007）

大きな存在

平成３年に河川法が改正され、河川環境に配慮されるようになった頃、オオサンショウウオも注目を浴びるようになってきた世の中の動きにあわせるように、研究者として、行政の立場もよく理解しながら、水族館という立ち位置を利用し、マスコミに積極的に情報提供するなど、うまく啓発されていたと今更ながらに感じます。時代の流れもあるでしょうが、オオサンショウウオの認知度を押し上げたのは、栃本さんの力が小さくないのではと思うのは少し言い過ぎでしょうか？また、人間一代限りではとてもオオサンショウウオの生態解明には太刀打ちできないと早くから見抜いておられ、そのための対策として誰もがいつでも研究できるようにとハンザキ研究所を立ち上げられたこと。研究者や関係者の大きなネットワークの必要性を早くから感じ、日本オオサンショウウオの会の発足に尽力されたことは本当に偉大な業績だと感じます。

最後に、私が水族館から異動し、今までのように調査ができなくなって悶々としていたときに、「調査はのんびりでいいんだよ。『行かないといけない』と思うと続かないよ。できる時にできることをやればいいんだよ。」と言ってくれたのを思い出します。私は最後まで一度も叱られたことがありませんでした。オオサンショウウオだけじゃなく、好きなことを楽しんでやることが大切だと教えていただきました。栃本さんとの出会いに、心より感謝したいと思います。

偲ぶ会で栃本先生の愛弟子として、心のこもったお言葉をいただきました（2019.7.21）



ハンザキ研究所のロゴマーク等は清水邦一様より提供いただいたイラストを元に使わせていただいております

栃本先生を偲ぶ

川崎医科大学　西松 伸一郎

栃本先生に初めてお会いしたのは、20 年前になるでしょうか。日本両棲類研究所からチュウゴクオオサンショウウオ２頭を譲り受けることになり、アドバイスをいただきに姫路市立水族館にお伺いしたのが最初です。「姫路水族館だより」や新聞に掲載された先生のエッセイをお送りいただいた際には、励ましの言葉もいただきました。

2017 年より岡山県内の調査に加わる機会を得て、先生のご恩に報いることができると思っていた矢先に、先生の訃報をいただきました。実は，その前日に川崎医大で飼育していたオオサンショウウオのうちの一頭が死亡しました。私にとってはダブルパンチです。

先生は、「オオサンショウウオの研究は１代ではできない。何代にも受け継がれていくことが大事」とおっしゃっていましたね。もとより微力ですが、私なりにオオサンショウウオの研究を続けていきます。

末筆になりましたが、先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

栃本先生の思い出

元豊岡市教育委員会　但馬国府・国分寺館長
会　員　加賀見 省一

栃本先生との出会いは、ハンザキ研究所か生野に開設されてからのことです。

きっかけは、平成 16 年の台風 23 号で出石川水系（現豊岡市）が氾濫、500 個体以上のオオサンショウウオが一時保護され大きな話題になりました。その後、河川改修工事が終了し保護された地点に放流されました。このことを機に、豊岡市ではオオサンショウウオの調査・保護を積極的に行うことを決め、栃本先生に相談した結果、マイクロチップの挿入と DB の作成を勧められました。それだけではなく先生は、わざわざチップの入っていないオオサンショウウオを用意いただき、ハンザキ研究所でチップ挿入の指導を受けました。国交省、県土木からいただいたデーターを基に、教育委員会の DB には 550 個体を登録し、過去の履歴が検索出るようになっています。

一昨年春に退職をしましたが、今後もオオサンショウウオの調査・保護に努めたいと思います。

栃本先生、今までの多くのご指導ありがとうございました。ゆっくりとお休みください。

写真は 2012 年 12 月 9 日、豊岡市立図書館でご講演いただいたときのものです。
（写真提供：豊岡市立図書館）

栃本先生ありがとうございました！

元兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員
帯広畜産大学 准教授　山内健生

栃本武良先生の御逝去を Facebook の記事で知り、あまりの驚きに声をあげてしまいました。昨年お会いした際はお元気そうだったのに…。突然のことに愕然としました。今回、栃本先生追悼集を発行されるとのご連絡をいただきましたので、栃本先生を偲ぶ思い出を寄稿させてい

ただきます。

私は 2001 年から 2003 年まで、島根県平田市のホシザキグリーン財団で働いていました。この財団は、組織としては宍道湖自然館ゴビウスとホシザキ野生生物研究所に分かれていましたが、職員は同じ部屋に机を並べていました。

私は研究所の所属だったのですが、栃本先生はゴビウスの館長をされていました（写真 1）。とはいっても、栃本館長は姫路市立水族館館長との兼任だったため、月に数日だけゴビウスで勤務されていました。しかも、来られた際にはフィールド調査などにも出られていたので、お会いする機会は多くありませんでした。さらに言うと、当時の直属の上司からは栃本館長のことを「気性の激しい人」と聞かされていましたので、最初は近寄りがたい印象をもっていました。

ところが、名古屋で開催された研究会に私が参加した際、栃本館長は新米の私をいろいろな人に紹介してくださり、何かと気にかけてくださいました。本当の栃本先生は、部下（厳密にいうと私は直属の部下ではなかったけど）に対して優しく、面倒見の良い方でした。栃本先生はその研究会で、ご自分の研究結果を、わかりやすく、ユーモアも交えて講演をされ、聴衆を魅了されました。多忙な管理職でありながらも地道な研究を続けられている栃本先生のことを、心底格好良いと思いました。

当時、私は淡水カメに寄生するヌマエラビル（旧名シナエラビル）について調べていたのですが、参考になる文献が少なく困っていたところ、古い読み物の中にこのヒルが載っていることを栃本先生が教えてくださいました。おかげで、無事にこのヒルに関する短報を書きあげることができました。このように、栃本先生には本当に親切にしていただいたのですが、しばらくして、ゴビウスでは、栃本館長から別の人へ館長が替わり、栃本先生と直接お目にかかる機会はなくなってしまいました。これは余談なのですが、館長が交代したとたん職場環境が劇的に悪くなり、少なからぬ職員が財団を離れてしまいました。組織にとってトップに立つ人間がいかに大切かを知ると共に、栃本館長の存在の大きさを痛感しました。

私が島根を離れた後も、栃本先生とは途切れることなく著作物の交換や年賀状で交流が続きました。研究で行き詰った時など、栃本先生からのご連絡は励みになりました。2004 年度が終わろうとする頃、私は当時勤めていた大学の任期が切れて失職しそうになりました。その時も栃本先生にはご心配いただき、最大限のお心遣いをしていただきました。今でも心の底からありがたく思っています。

昨年、私は、ハンザキ研究所で開催された講演会の講師に呼んでいただき、十数年ぶりに栃本先生と再会することができました。講演の前には栃本先生自らが大勢の前で私の紹介をしてくださり、嬉しさもひとしおでした（写真 2）。それから、栃本先生は、研究所の飼育施設などを直接ご案内、ご解説してくださいました。テレビ番組を見るよりもオオサンショウウオのモニターを見ている方が面白いともおっしゃっていました。定年後も研究を続けられている栃本先生のお姿は、やっぱり格好良いなあと思いました。

私はオオサンショウウオの調査研究には携わっていませんが、栃本先生は私の憧れの研究者です。栃本先生の研究に対するご姿勢を少しでも見習って、これからも精進したいと思います。

写真 1　竹下景子さんを囲むホシザキグリーン財団のメンバー（右から 2 人目が栃本先生）

写真 2　ハンザキ研究所にて
（右側が栃本先生、左側が山内）

地域自然誌の記録者としての栃本さん

日本オオサンショウウオの会 事務局長
清水善吉

栃本さんと知り合った時期は定かではないが，ネズミ類の別刷り送った礼状を 1994 年にいただいているので，25 年以上のおつきあいになる．氏にとっては，清水はネズミ屋の認識が強く，その方面の相談を度々受けている．

2003 年にはハンザキの吐瀉物の写真が届き，含まれているネズミの種を同定して欲しいとの添え書きがあった．現物も送ってもらったが，上顎骨がなかったので同定にはけっこう苦労した思い出がある．また，ハンザキ研に浸入したネズミや付近で拾ったモグラの標本を見せていただき,「あんこう」等で報告をさせてもらった．

地域の自然を記録に残すことにも熱心であり，ハンザキ研には未公表の鳥やキノコ，虫等の標本がたくさん残されている．これらを報告し，標本として引き継いでいくことも栃本さんへの餞になるであろう．ただ，私がネズミ屋という認識がどこで変わったのだろう？，上述の肩書きの役も残してくれた．

最後に，ハンザキとあちらで一杯！

清水千佳子 画

栃本先生へ

前 名張市教育委員会　川内　彬宏

栃本先生ご無沙汰しています。日本オオサンショウウオの会南部町大会の２日目、三重県までの帰路で朝来へ寄り道をした際、先生は体調が優れず大会にはご欠席されていたのに、無理を押して私のためにハンザキ研で待っていてくれましたね。これでもかと言うほど丁寧に、また、楽しそうに説明してくださったのを鮮明に覚えています。移動の疲れなどすっかり忘れてしまっていました。

先生は別れ際、大会の様子や先生を慕う多くの皆さんのことを気にして「大会は盛り上がった？」「〇〇さんは元気やった？」「〇〇くんは来てたんか！？」と私を質問攻めにしましたね。実は､同じぐらい｢栃本先生は元気やったか？｣

と帰ってから先生を心配している皆さんに聞かれましたよ。

先生のことです。そちらでもお変わりなくオオサンショウウオと仲良くやってるんだろうと思います。少し先のことになるとは思いますが、私がそちらへ行ったときは、また色々と教えてくださいね。

ハンザキ神、栃本先生の思い出

島根県立宍道湖自然館　寺岡誠二

栃本先生ほど、私の人生に影響を与えて下さった個性的な師匠がいたでしょうか。先生との交流で特に強い印象が残っていることは、ハンザキ研で先生に人工巣穴を案内してくださった時のことです。先生は、「今度はヒトも中に入って観察できるような人工巣穴を考えている」、「オオサンショウウオが卵を守っているところを、私が見守るんだ、どうだ！いいだろう‼」といわれ、続けて「そして、そのままコンクリートで蓋をしてくれていい」。と軽快に笑いながら栃本先生らしいユーモアたっぷりに言われました。私は驚いて、“このお方はオオサンショウウオの神になるおつもりなのか？”と思ってしまい、「そうしたら、その上に先生の銅像を建て、語りべになります！」と言ってしまった。

栃本先生の、常にゆったりとした力強い口調やふるまいは、まさにオオサンショウウオの化身のようで、ハンザキ的人生のススメを執筆していただきたかった。宍道湖自然館の初代館長を務めて下さり、私の心の支えでもありました。

栃本先生、かけがえのない数々のご教示をいただき、本当にありがとうございました。

日本オオサンショウウオの会にて
（2013 年 10 月 12 日）

先生との出会い

神戸市立須磨海浜水族園　東口信行

先生との出会いはゴビウスの館長をされていた時の採用面接でした。メダカの学名を瞬時に答えると、関心して頂いたことを昨日のことのように覚えています。見事に不採用だったのですが、次にお会いした時に覚えて下さっていたのは、皆様も知る所の先生の記憶力の良さです。

オオサンショウウオの調査方法を学びに市川に行かせて頂いた際には、私の足がヤマビルに吸われているのを見て、「血を吸って大きくなったヤマビルの写真を撮りたいからそのまま吸わせておいてくれ」と言われた時の先生の自然への好奇心に敬服致しました。

オオサンショウウオの若手三羽烏と文章にして下さった時の嬉しさと、その後、オオサンショウウオと疎遠になってしまった自分に後ろめたさを感じていましたが、お会いするといつも笑顔で先生の周りで起こった自然の面白い事象

を活き活きと話して下さいました。
また、ビールを片手にお話しさせて下さい。
　心よりご冥福をお祈り致します。

人工巣穴を案内する先生（2016 年 10 月 19 日）

栃本武良さんのこと

東京水産大学卒　林　英一

　一年後輩の彼とはお世話になった教授の退職謝恩会立ち上げ発起人として一緒になったこと、のちに姫路市立水族館長になったことを知る程度の付き合いであった。
　ハンザキ研究所をたちあげたというので同窓会組織である楽水会で講演をお願いし、彼は新聞の切り抜きや活動記録など持参して熱弁をふるい、「NPO 法人日本ハンザキ研究所」への支援を呼びかけた。その内容はまさに「目から鱗」。
　2 週間後に私は研究所を訪問して小学校の廃校を朝来市より借り受け研究所としているのに驚かされた。彼の案内で懐中電灯片手に近くの川でハンザキを鑑賞した。帰宅してすぐ地元八王子市の知人達に会員と図書の話をしたところ何人かはすぐに会員手続きをしてくれた。私は息子と相談し、部屋を占拠している漫画の入った箱を送り出した。二度目の研究所訪問予定の数日前に奥様から入院で会えないとお電話をいただいた。次の消息は訃報だった。。
　惜しい人を亡くしたものだ。

追悼　栃本武良先生

会　員　宇那木 隆

　栃本先生は令和元年 5 月 28 日病気のため姫路の病院で逝去されました。この報を聞いて、私は大変驚きでもありましたが、遂にこの日が来てしまったのかという想いがしました。
　私が栃本先生のことを知ったのは先生が姫路水族館長をされている頃からで、オオサンショウウオ研究の第一人者だというとても偉い方だという認識でした。
　兵庫県生物学会の副会長されていた関係でお話をする機会もあり、2009 年頃からハンザキ研究所主催の黒川のきのこ観察会に横山了爾先生の手伝いで行くようになって親しくお話していただくようになりました。観察会や調査は 2014 年に終わりましたが、その後も「黒川のきのこの冊子（仮題）」を作る事になり資料作成の打ち合わせに研究所に通いました。研究所では、先生のライフワークのオオサンショウウオについてのお話とか、研究所のある旧黒川小中学校跡を中心に子供たちの野外学習拠点にするとか生野地域の図書館を作る計画など熱く語っておられました。私が所蔵していた書物を家族から始末するように言われている話をしたところそれでは持ってきなさいと言ってくださり昨年末から運び込んでいました。その 3 回目が平成 31 年 3 月 19 日でした。その折りにも少し前に大病してたと元気そうに話されていました。これが私にとって最後の先生のお姿でした。
　数年前から毎年のように大きな病気で姫路医療センターに入院された話を直接お聞きしてい

ました。

先生は常々、オオサンショウウオは人間より寿命が長いから研究者が何代も引き継いで行かなければ研究は進まないと言われていました。

オオサンショウウオ研究の後継者は見つかり概ね引き継ぎも出来ているそうです。先生はこの日が来ることを予見していたのかなと思います。でも早すぎると思います。そろそろ書物の４回目を持って行こうかと思っていた矢先でした。本当にもうお目にかかれないこと思うと残念です。きのこの冊子も未完のままです。

先生が計画されたり、進めていた事業が継続される事を願い、ご冥福をお祈りします。

キノコの定点調査

マツタケも標本として
ホルマリン漬けにして
しまう栃本先生

河川工事のため一時保護していたハンザキを元の川に戻すので、呼んでくれたのです。

私は四頭のハンザキを元の川に放ちました。ハンザキを抱いたのはこの時が初めてで、興奮したことが懐かしく思い出されます。

これ以降黒川のハンザキ研究所に通い、栃本先生からハンザキについて教えて頂きました。中でもハンザキ研究所の会誌「あんこう」により、ハンザキに関する著書、研究の現在を学びました。また栃本先生の『飼育係は今日もフィールドへ』の著書により人生についても考えさせられました。晩年は風貌までハンザキに似てこられましたが、先生の思い出と俤は何時までも私の脳裏から消え去ることは有りません。

せせらぎの音は暮れざる山椒魚

征之進

ハンザキを放流する杉本様
後方に作業を見守る栃本先生の姿が

ハンザキ仙人・栃本先生

会　員　杉本 征之進

栃本先生の一ファンの杉本征之進と申します。

先生と知り合いになったある日「ハンザキを抱きに来ないか」と電話を頂きました。いきなりの事で合点できませんでしたが、約束の時間にハンザキ研究所に行くと水槽からハンザキを揚げている処でした。

栃本先生、なんて自由な人なんだ！

会　員　高橋瑞樹

先生とお会いしたのはかれこれもう 10 年ほど前になろうか。現理事長の岡田さんとハン研を訪れた時の印象は今でも鮮明だ。当時お酒を相当飲んでいらした先生だが、体調がよろしくないという噂を聞き、僕は果物を手土産に登場した。すると、「いや～ビール持ってきてくれた

らよかったのに！」と元気よくお答えになるではないか。「少しでも健康で長生き」をモットーにコツコツ努力を重ねている日本国民がほとんどの中、「人生やりたいことやったもん勝ち！」と言っているようで、実に気持ちの良い人だな、と思った。

「プールの中で死んで、ハンザキに食われて本望！」という発言を耳にした時には、実におかしな人だな、と思った。論文やデータなんかも惜しまずどんどんくれるし、とにかく規格外にオープンで自由な御仁であった。

ハンザキ研で研究する者として、そんな栃本遺伝子をしっかり継承して、あまりかしこまらず、自由に楽しく研究を続けていきたい。

感謝！

ハンザキ研にてアメリカバックネル大学生と生野高校生の交流授業をしていただいた時の様子
左上が高橋様（2018.8.2）

栃本先生への感謝の意を込めて

会　員　笹田直樹

入社早々に先輩に案内された山間の養殖池には、被災河川から保護された 250 個体ほどのオオサンショウウオが蠢いていました。飼育管理の合間に「あなたは新人ですか？大学での専門は？」それが先生にかけて頂いた初めての言葉でした。夜間調査、釣りだし、個体の計測・記録等、調査の基礎はすべて、先生から学ばせて頂きました。しかし、基本調査を習得すると、先生の指導の難易度は上昇。3 日間連続して新規個体が出現しなくなるまで調査を継続する。夜から朝まで、一定区間の調査を 2 時間間隔で繰り返す。マイクロチップを導入する。発信機で行動を追跡する。自称、飼育員の先生が飼育技術や野外調査で体得されたノウハウの全てが、オオサンショウウオ調査や生態解明の進展に大きく寄与しています。

20 年ほど前、先生と二人で市川を調査し、深夜に飲んだビールは最高でした。明るく笑い、データを確認する先生の姿は忘れません。

ご冥福をお祈りします。

栃本先生へ感謝です

会　員　作本京子・Andrew Innes

栃本先生と最初にお会いしたのは 2 年前 2017 年の 2 月でした。ハンザキ研究所の施設を見に主人と生野駅で借りたレンタサイクルで訪れたのです。

地図を見た限りでは 30 分くらいで着きそうだ…と思っていたのに実際にかかった時間は 1 時間半！他の参加者ならびにスタッフの方々に迷惑かけてしまい，とても恥ずかしかった事を覚えています。この時の先生は飄々とされていて，姫路水族館での出来事やハンザキへの溢れん思いを滔々と話して下さいました。

その後も何度かつまらない質問メールをさせていただき，その度に丁寧かつ暖かい返信メールを返信いただきました。私達にとってハンザキの象徴である先生がいなくなり，寂しく，とても残念です。

でもこれからも私達はキレイな川を見るたびに巣穴を探し，通行人を捕まえて「ここにオオサンショウウオはいますか?」と聞き続けるでしょう。興味はつきません。先生のおかげで新しい世界が広がった事に感謝です

おつかれさまでした

会　員　仲川希良（モデル）

初めてハンザキ研究所を訪れたのはテレビの取材です。オオサンショウウオに関して無知な私に、栃本先生は基本的なところからひとつひとつ説明してくださいました。研究のきっかけであるその寿命に関して質問したのですが「私が生きてる間には分からないだろうね。あとの人にもっと頑張ってほしいねぇ。」と笑ってらっしゃるのを見て、ひとつの生き物について知るというのはこんなにも途方もなく、ロマンのある行為なのかと驚きました。

山間の手作りの研究所で、不思議な生き物と向き合ってる栃本先生の存在は、私の心にその後も強く残り続けました。研究所を満たす深い情熱とゆっくりとした時間。その時間をもってしても終わりはない「ひとつの生き物を知る」ための道のり。それを一歩一歩進める栃本先生の姿勢。全てが、これからも私の生活に大きく影響を与え続けるだろうと感じます。お会い出来て本当に良かった。東京に住む私には、今もあの研究所でハンザキと向き合っていらっしゃるように思えてなりません。

長い長い研究、おつかれさまでした。

釣りビジョン「森のちから」の撮影で
2013.9.11

栃本先生　ありがとう

会　員　いくの銀谷工房　斉藤敬子

ふらりと入って来られ、「あんなの作れないか。これはどう？」と無理難題を。それに、私たちは挑戦？

こんな不思議なことがありました。

栃本先生が亡くなられた夜、主人の知り合いが私の作業を見て「何を作っているんですか」と、「オオサンショウウオのティッシュケースを作っているんですよ」「かわいいねえ」と、いきなり　３０注文(*_*)

また、先生が懇意されていたヤマダストアーさんから、新店舗の開店にお客様に配布用にと、あんこうクッキーの注文をいただき生野の PR させていただきました。

栃本先生からの大きなプレゼントだと感じています。

いろんな面で、応援していただき、いろいろな人ともつながりができました。

オオサンショウウオを作ってきてよかったと、つくづく実感しています。

これからも、歩んでいきます。ありがとうございました。

先生考案
お気に入りの
あんこう抱き
マクラ

2009.9.16

あんこう
ティッシュ
ケース

法人として

NPO 法人日本ハンザキ研究所　副理事長
黒田哲郎

2007 年のいつだったか、「日本ハンザキ研究所を NPO 法人にするから手伝って」と地域活性化の仕事の中で知り合った池上さん(現副事務局長)に誘われ、栃本先生の私設研究所を NPO 法人化する仲間に加わることを決めた。

私は生き物には興味がほとんどない。完全にゼロではないが生き物好きでないことは確かだ。加わった理由は法人運営に興味があったからである。自分が法人の立ち上げに参画し、その運営に関ることが出来る機会はそうそうあることではない。

そこで出会った栃本先生は、オオサンショウウオのみならず、様々な生き物や植物、それ以外の興味を持ったものに対し、まるで子供のように向き合う人だった。そして驚くことに朝昼晩と 500ml の缶ビール 2 本ずつを飲んで動力源とし、夜が更けてくるといろんな種類の酒で晩酌するという信じられないタフさを持つ方だった。

工夫して DIY するのが好きで、手作り感満載の個性的な研究所を作り上げられた。変わった道具が好きで見つけては買ってきて、それを人に使わせ子供のように喜んでおられた。また非常におおらかで怒らず、やさしく教育することを信条とし、「僕は 40 年間水族館の飼育係だったけれど･･･」といつも自分を誇らず、大きく見せることをせず、常に現場第一の考えを口にされていた。私はこれまでに出会ったことのないタイプの人であったので、大変興味深くお付き合いさせていただいた。

しかし数年前に歯をまとめて 6 本抜かれてからは一気に体力が衰え、疲れを口にされるようになり、エネルギッシュさが少し削がれてしまったように見受けられた。この時は「今すぐ全部抜いてくれなきゃもう来ない」とお医者様を困らせたそうな。そしてここ 1 年程は日中も自室でお休みになることが増えた。無理が利かなくなり、植物と生き物の管理、スクラップや資料の整理がやっとであったように見えた。

だが、多くの人に支えられてオオサンショウウオと共に暮らし、最後の最後まで好きなことをして人生を終えられた幸せな人だったのではないか。

生前より「ハンザキ研は、栃本先生がおられなくなったら続けられなくなって解散でしょ」などの言葉を耳にすることがあった。未だに分からないことが多くあるオオサンショウウオの研究を、末永く続けてもらうために法人化したのであるから、それをここで終わらせる訳にはいかない。栃本先生に多くを委ねていた研究所を、これからは法人としてきちんと管理してゆかなければならない。

だが、やってみて初めて建物や中の資料管理などのハード面、運営方法などのソフト面を全て面倒をみることの大変さを痛感している。逆立ちしても栃本先生と同じことは出来ないが、この研究所をますます発展させ、次の世代へと繋げてゆくためにも力を合わせ、新しいやり方を模索しながら頑張ってゆくことが、我々に課せられた使命だと思っている。

プールを保護施設に改修したての頃(2007.11.28)

追悼　渓の人・栃本武良先生へ

日本ハンザキ研究所　理事　中島　悟

栃本武良先生が亡くなられた。オオサンショウウオ研究の第一人者であり、未知の動物に光を当て、数多の解明と多くの後進を育てられた。突然の訃報に接したとき、茫然と喪失感が去来する感覚であった。

栃本先生との出会いは、私が前職の水族館人であった 30 年以上前に遡るが、オオサンショウウオの野外調査を一から教導頂いたのは、現職の環境調査を生業とした後、平成二年災害を受けた円山川水系建屋川での河川工事に伴うオオサンショウウオ保護に携わってからである。保護、飼育、現状復帰というこれまでに類を見ない事業であった。栃本先生曰く「工事による保護なんて私も初めての経験です。何事も試行錯誤です。」好奇心と探求心、そして泰然自若たる心構えに触れた瞬間であった。この事業は、その後各地で行われたオオサンショウウオ保護の礎となった。

渓流に魅せられ、飽くなき探求心を全うされた栃本武良先生、心からご冥福をお祈り申し上げます。

ありがとうございました

日本ハンザキ研究所　理事　鞍田悦子

栃本先生、もうお会いすることが出来ないのですね。黒川に関わるようになって以来色々お世話になりました。

家族だけでなく、友人知人にも熱心に研究所を案内していただきました。今思うと、先生の大事な時間を使っていただいたのですね。
黒川へのバスの中での会話も楽しい思い出です。
本当にありがとうございました。

追悼文

日本ハンザキ研究所　理事　竹村幸男

２年前の春、母校の面影がわずかに残る日本ハンザキ研究所の建物を４０数年ぶりに訪れた。その時、偶然にも栃本武良先生に初めてお目にかかった。会話をしたのはほんの数分で、挨拶程度で終わったと記憶している。その時、帰り際に『飼育係はきょうもフィールドへ』という先生の著書をいただいた。

次にお会いしたのは昨年の秋。飼育しておられたヤマビルについて、話を聞く機会があった。残念ながら、先生とお会いしたのは、この２度のみである。

わずかな出会いであったが、いただいた著書を読み返しながら、その場面を思い浮かべてみた。世の中に生き物が好きな人は多数いるけれど、先生こそ本物の“生き物好き”な方であり、それを生涯にわたって貫き通された方であったという思いをことさらに強くした。

ご冥福をお祈りします。

故栃本武良先生を偲ぶ思い出や先生への思い

日本ハンザキ研究所　理事
広島市安佐動物公園　田口勇輝

栃本先生！ 先生と初めてお会いしたのは大学院でハンザキの研究を始め、姫路市立水族館の館長室を訪れた時でしたね。修士課程でハンザキに魅了されて博士課程へ進学し、先生が 40 年以上続けられてきた市川のフィールドを継続調査させてもらうことになりました。7 夜連続の徹夜調査では先生の寝室を使わせていただき、起きてこられた先生とバトンタッチで布団に入りました。調査後に、観察したハンザキのことをご報告するといつも話に花が咲いてなかなか

寝られず、でも、本当に楽しかったことを覚えています。話が盛り上がってくると、いつもの「僕」ではなく「俺はね、」と熱が入ってこられ、なんだかとても嬉しい気持ちになりました。本当は関西で就職をして、休みの日にはハンザキ研の活動に参加することが学生時代に私が描いていた将来像でした。安佐動物公園へ受験する機会を得て大変悩みましたが、「安佐には小原さんが築いた他にはない歴史と、良い繁殖施設、それにフィールドもある。ぜひ、チャレンジしたほうがいい！」と強く背中を押してくださいました。就職してからも悩みの尽きなかった私を応援してくださり、結婚式にはスピーチをしていただき「ハンザキとともに 60 年頑張れ！」と激励していただいたことは生涯忘れません。「毎年、調査データをまとめるように。そうしなきゃ、データが腐っちゃう！」といつも叱咤してくださったことも、昨日のことのように覚えています。公私共にたくさんたくさんお世話になった栃本先生は、私にとって肉親のような、いや肉親を超える存在でした。先生の後を継いで、ハンザキの研究と保全に人生をかけます。与えられた場所を精一杯活かして、私にしかできないハンザキの研究や保全活動を進め、またいつかその成果をもってハンザキの話で栃本先生と盛り上がれる日がくることを楽しみにして頑張ります！ 本当にありがとうございました。

2011 年 3 月　結婚式でスピーチをしていただいた様子.

2011 年 9 月　Web ナショジオの取材にて.

2006 年 8 月　瀬戸市オオサンショウウオ調査委員会の調査にて.

田口愛子画
会誌あんこう第 6 号掲載

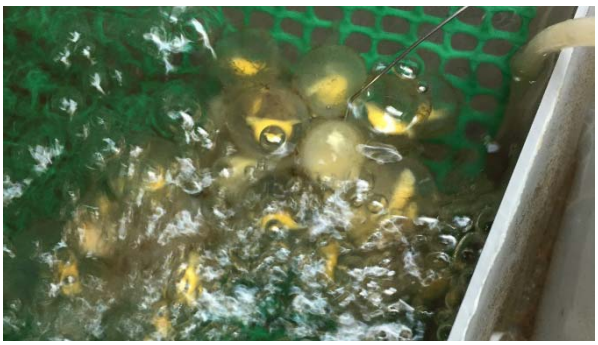
“あんこうの卵”

日本ハンザキ研究所 事務局長　奥藤　修

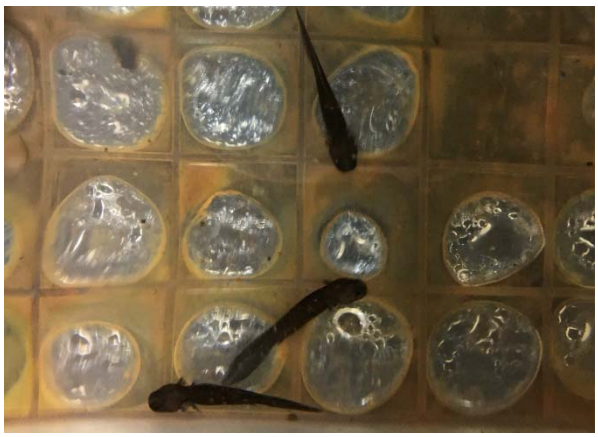
栃本先生、「ミニアクアリュウム」の水槽には今年もオオサンショウウオの 0 歳幼生が元気に泳いでいます。私たちは、絶えさせずマイクロチップを射た幼生を川に放すことが使命のように思っています。

子供のころ魚取りが大好きだった私が、今は黒川ダム湖に水没した源流付近の川で、長い竹竿を使って深い土の穴を突きまわしていると、6、7 匹のオオサンショウウオと共に、真っ白なものが川一面を覆いつくすかと思うほど大量に流れ出してきました。 私は、びっくり仰天して早々に家に逃げ帰った話しをしましたよね。先生は笑いながらご自分の子供のころの腕白ぶりの話を聞かせてくれました。

毎年、卵の塊を見るたびに、あの時の光景が思い出され、あの巣穴はきっと素晴らしい巣穴で、産卵大パーティが繰り広げられていたのではと想像しています。



オオサンショウウオの卵



0 才幼生

『引き継がれる夢』　～NPO 設立の頃～

日本ハンザキ研究所 副事務局長　池上優一

大山椒魚仙人が逝ってしまわれた。すぐに思い出されるのは宿舎でオオサンショウウオの巣穴が常時観察できるパソコンモニターに目をやりながら、ネギ納豆をつまみに缶ビールを片手に至福の時を満喫されていた（私にはそう見えた）氏の姿である。「三度の主食がビールだよ」と豪語しておられた姿が本当に懐かしい。

実家の姫路市から人里離れた生野町黒川の廃校宿舎に一人で住み、私から見るとオオサンショウウオの研究生活を送る言わば仙人であった。私的理由で、申し訳なくもここ長らく全くの御無沙汰となってしまっており、メールによる事務局会議の議事録と時々の事務局との電話によって氏の近況を知るのみであった。それでも、テレビの人気番組に出られたり、いろいろな番組に取り上げられたりと活躍されている様子は常に事務局から知らせてもらっていた。情報が入る度に、だいたい逃さず録画していた。

ところが最近、氏は理事長職を岡田純さんに委ねられており、ここ数年は氏の健康状況を心配する電話が増えてきていた。「まさかそんなことは!!」と思いつつ日々が過ぎていたが、今年 4 月に氏に手紙を差し上げ、電話でも話す機会があった。残念ながらそれが最後の会話で、それからすぐに帰らぬ人となってしまわれた。

思い返せば、この日本ハンザキ研究所の活動に私が最も関わったのは、2005 年（平成 17 年）の氏の定年退官の時で、氏の夢の実現に向けてのささやかな手伝いが始まった時からである。当初は他の NPO の支援を受けての活動開始であり、さらに地域の人々や行政の支援も少しずつ広げていき、「廃校となっていた黒川小中学校の職員宿舎に逗留しての夜間調査と昼間の研究活動を行いたい」という氏の希望の実現に協力することであった（使用許可が出たのは同年 8 月）。その時の壮大で一見夢物語としか思えなか

った氏の構想はホームページ内の「ハンザキ研ニュース第 1 号」に示されている。

職員宿舎のライフラインの復活（電気ガスは同年 8 月、下水道は同年 12 月）、研究備品の充当などから始めていった。とにかく氏の行動は迅速で、自ら集められた長年の図書や資料さらにはグッズ等の搬入を始め、あれよあれよという間にいろいろな事務用品が取り揃えられ整備されていったのである。その過程では、マンパワーとしてのボランティアの方々による多くの協力に依る所が大きかったが、生活の基本となる光熱費や印刷費などの捻出には限界があり、活動の収支を睨みつつ解決手法を模索していた。結局は公的な法人格としての活動を目指さなければそれらの目標に辿り着くのはかなり困難であると私たちは考えた。その点に関しては氏とかなり話し合い、最終的には納得していただいた。

そして NPO 法人設立のための準備を始めた。この法人の目的は何なのか、どんな活動を行っていくのか、その体制はどうするか、将来的にはどんな姿にもっていくのか等々、多少の意見の食い違いがあったもののいろいろと話し合っていき、「オオサンショウウオの保護保全、そのための謎の解明」が第一目標であるが、「地域の活性化にも貢献でき、自立した法人格運営ができること」も重要であるとの共通認識で固まっていった。法人の目的が明確になった上で、定款や規約の作成、現在も続いているような活動内容の明確化、パンフレットの制作、会員の募集などを順次進めていった。

結局、認証取得のための申請は 2008 年(平成 20 年)、4 月の設立総会の後の 5 月 、認可は同 8 月であった。同年秋には、「日本オオサンショウウオの会の第 5 回 朝来市大会」の開催も決まっており、この 2006～2007 年は色々な準備で万全のスタートとなるよう気が抜けない中、忙しくも希望に満ちた二年間であった。その経緯に関しては、「日本ハンザキ研究所ニュース第 27 号」（2008 年 4 月）に氏が詳しく記されている。一方この間から後に続いては、氏も書いておられるように、夢の構想に関して言わばほぼ全てが具現化していくという信じられない展開が続いたのであった。

今、氏を偲びながら思う。氏にとっては 30 年来の市川源流でのオオサンショウウオ毎年調査の継続中であり、ただ拠点が至近の位置となって自由に調査研究に没頭できるという一番大きな夢の実現であったのだろう。その実現の証が氏の私的な研究機関「日本ハンザキ研究所」であったのだが、公的な法人格としての「NPO 法人 日本ハンザキ研究所」とすることによって、民間からの支援や公的な事業を受け易くなるため、氏の夢の実現により近づくことが出来ると私たちは考えたのである。

あれから 10 年という月日が経過した。

突然の訃報で誠に残念で寂しい気持ちであるが、それらの感情を振り切るべく氏が日頃述べていた言葉がある。「私一代でオオサンショウウオの謎は解明できないよ。だって彼らの方が寿命が長いのだから。研究者が引き継いで研究を続けていかないと解明できないよ。」氏は、早くから後継者を定めて調査研究をバトンタッチし、オオサンショウウオの生態解明を託すつもりであったのだ。

今は岡田純博士が第二走者となって氏のバトンを引き継がれ、水族館や博物館構想という新たな展開へと向かっている。この機会に次のステップに向けての飛躍が期待される。

研究生活の一コマ

黒川地区のイベントにて

学童の夏休みイベントで

施設の公開準備中

水辺観察会前の挨拶で

観察施設完成時の取材

栃本先生の生態的特徴

日本ハンザキ研究所 事務局員
(株)荒谷建設コンサルタント　山﨑寛子

栃本先生はどんな人？と尋ねられたら、皆さんは何と答えますか。
水族館の館長で、ハンザキ研を立ち上げて～といった経歴とは異なる、栃本先生の生態的特徴を挙げてみます。

・生野町黒川を主なすみかとするが、時折姫路周辺にも出現する。
・解読不能な謎フォントを駆使する。
・何でもかんでもホルマリンに放り込む。
・何でもかんでも分類した上で溜め込む。
・頭でっかちな子供を論破するのが好きである。
・少し頑固なところがあり、へそを曲げると時に長引く。
・医者・病院がとても嫌いである。　　, etc.

ホルマリン漬け特大マツタケ

生態的特徴は色々とありますが、やはり一番は「生き物とフィールドをこよなく愛していた。」でしょう。先生の生態を観察する度に、「私も生き物は好きだけど、栃本先生ほど好きじゃないなぁ。」と思っていました。ハンザキ研がなかったら、私は今の仕事をできていなかったかもしれません。本当に感謝しています。ありがとうございました。

夜間観察会での捕獲の様子

―栃本先生を偲ぶ―

日本ハンザキ研究所 事務局員　増子善昭

「暇そうやから、日本ハンザキ研究所を覗いてみたら？」などと他の会で知り合った事務局長に誘われ何となく十年ほど前に参加させてもらって出会ったのが当時イモトの番組に出演したとの触れ込みの栃本先生。

変人。ビールが活動のエネルギー源。でも、オオサンショウウオを語りだすと熱い！ハンザキの T シャツと下駄履き。ハン研に顔を出させてもらうと、オオサンショウウオ研究の第一人者であることが判る。しかしながら、こちらは何せ人間を含みどちらかと言うと動物や昆虫、魚や生き物はかなり苦手。

何となく事務局員にならせていただいたものの・・・

でも、先生の「世界にも稀で貴重なオオサンショウウオの存続に関わることは、自然保護に繋がるんだよ！」が決定打。しかも、「出られるときに参加してくれればいいんだよ」で、今も事務局員で居させてもらっています。

いろんな活動を続けていく上での肝要な考え方を教えていただいたと思っています。排他的にならず、少しでも共通点が有れば巻き込む！先生が収集されたホルマリン漬け品はオオサンショウウオや川の生き物は言うに及ばず、魚介類、昆虫類、両生類、鳥類、ほ乳類とキノコ類等々、その数 1000 ほど。中にはアナグマの糞や交通事故にあったチョウチョの死骸まで収集されていました。周辺の植物写真や両生類の世界中の切手類や蔵書、各種ファイルを垣間見ると先生の興味の幅の広さに驚かされます。

栃本先生、ご冥福をお祈り致します。

偲ぶ会で司会を仰せつかる

栃本先生との出会い

日本ハンザキ研究所 事務局員　増子裕子

ハンザキ研に通うようになったのはいつ頃だったでしょう？

生野に生まれ、生野で育ち、住み続けて半世紀以上。子供の頃からハンザキの存在はもちろん知ってはいましたが、何の知識も持たず、特に興味を持つ事もなく、手に触れることも有り

ませんでした。というのも生来どちらかというと両生類は苦手な方です。そんな私がいつの間にかハンザキ研のお手伝いさせてもらうようになり、今日まで継続出来てきたのは、先生との出合いとその存在が有ったからに他ならないのです。事務局会議出席が都合で２ヶ月ぶりになることも多く、お役に立ててなくて申訳ない気持で伺うと満面の笑みで「お疲れさま、来られるときに来てくれれば良いんだよ」といつでもウエルカムの先生の対応に救われました。そして、何気ない会話の中にもその温かいお人柄に触れる事で非日常の空間にいる居心地の良さを感じ、楽しかったものです。

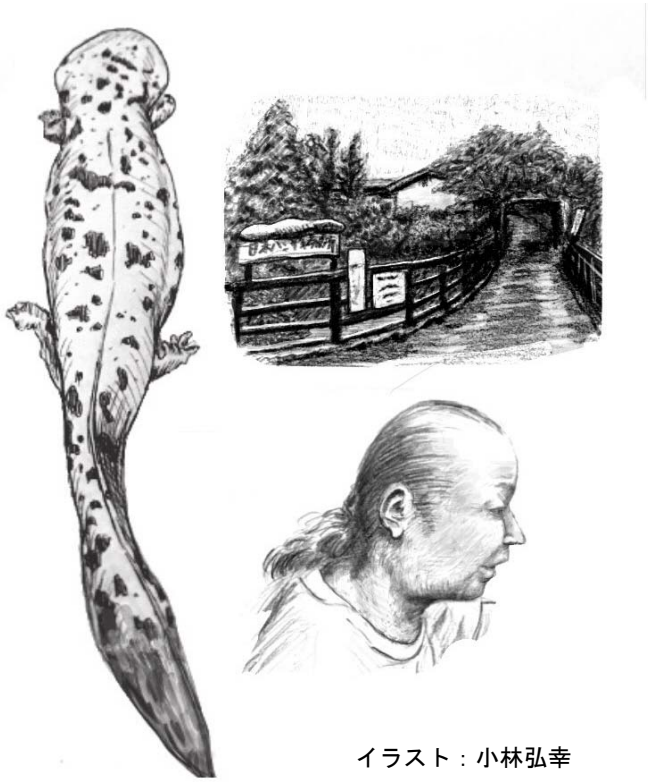
思い返せば魅力を感じたのはハンザキより先生の方が先でした。遺された大量の資料を目にすると先生はほんとに自然を愛し、根っからの研究者であったのだなあと改めて思います。

栃本先生を偲んで

日本ハンザキ研究所 事務局員 小林弘幸

私が初めて栃本先生と話したのは、3 年前の夏の夜間観察会でした。初めてハンザキ研に来た私に、栃本先生は「ブラックバスの標本は見た？」と言って奥の標本室まで私を連れて行き、膨大な数の標本とオオサンショウオのグッズコレクションを解説付きで見せてくれました。その気さくな人柄に惹かれ、ちょこちょことハンザキ研に来ているうちに「事務局員になりなさい」と半ば強引な勧誘を受け、事務局員として活動に参加することになった後も、栃本先生にはオオサンショウオのことなど色々と教えていただきました。

栃本先生の豊富な知識や経験には敬意を払わずにはいられませんでした。栃本先生という大きな支えを失ってしまった今、ハンザキ研究所は新たな転機を迎えつつあります。しかし、どんな変化が訪れようとも、栃本先生の残した偉大な功績やその意思は、ハンザキ研の皆さんにしっかりと受け継がれ、これからのハンザキ研究所を支えて行くのだろうと私は思います。



イラスト：小林弘幸

栃本先生より承りました

日本ハンザキ研究所　事務局員 近藤　宏

栃本先生が残してくれたものはたくさんある。オオサンショウウオの追跡データ、標本、新聞の切り抜きなどだ。残念ながらすべてのコレクションは、(栃本ルール)によって整理されているために何処に何があるかわからくなっている。

このままでは貴重な資料も存在しないと同じ事になるので、まずは整理とデジタル化を進めていきたい。

最も大きな遺産は「特定非営利活動法人・日本ハンザキ研究所」だと思う。コレクション保管場所、事務所などの物理的な場所であるのはもちろんのこと、オオサンショウウオ聖地というシンボル的な場所としての役目もになっている。

法人は法律によって「人」とされるもの。新陳代謝(会員の代替わり)しながら永遠の命を持つ「人」

確認されているオオサンショウウオの寿命は150年。少なくともその記録を更新したいと思う。

夜間観察会での個体捕獲

先生との出会い

日本ハンザキ研究所 事務局員　吉賀一弘

事務局員として活動に参加する様になってしばらく経ったある時、先生からハンザキの資料を郵送で頂きました。

資料の中にはハンザキに配慮した河川改修について詳細に記載されたものもありました。私が学生時代に河川やコンクリートについて学んでいたことを覚えておられ、参考にと同封して下さったのです。この温かなお心遣いにとても感動しました。

そんな先生と最後にお会いしたのは昨年末、黒川に滞在した時でした。私はお土産にと、80年程前のハンザキ研究本を持参しました。古い本だったのでもしかすると先生もご存知ないかもと考えましたがその通りでした。「初めて見たよ」と笑顔で仰る先生を見て自分が書いた本でもないのに嬉しい気持ちになったのがつい先日の様です。

先生との出会いをきっかけに、ハンザキに関わる多くの方々と知り合うことができました。先生が繋いで下さった方々と共にハンザキのこれからについて考えていこうと思います。

まみちゃんと呼んでくれた先生

日本ハンザキ研究所 事務局員　黒田真澄

栃本先生とはNPO法人の立ち上げ準備の時から事務局としてずっと関わらせていただいたので、もう14年になります。日々の事務仕事で研究所にいる時間も多く身の回りのお世話もさせていただいていたので「まみちゃんはボクの秘書だからね」と笑いながらよく紹介していただいたものです。(呼びやすいからまみちゃんにするよと言われた日が懐かしい...)

日本オオサンショウウオの会の事務局も「一緒にやる？」と声をかけていただいて、二人三脚で総会の準備をするなど貴重な経験をさせていただきました。そのお陰で多くのオオサン関係者の方々とも繋がりが出来ました。

ハンザキ研オリジナルグッズ作りは、いつも先生の「こんなのあったらいいね。出来る？」の一言から始まりました。数種類のデザインを考えて提案すると、必ず絵柄や写真の大きな物を選ばれ「もっと大きく出来る？」と。印刷面ギリギリまで大きくして出来上がったタオルやクリアファイルは人気商品となって売れてゆき、活動資金の一部となっています。特に白いTシャツはお気に入りでユニフォームのように着て

おられましたね。

ハンザキや生き物に興味を持つ若い人や子ども達が見学に来ると、本当に嬉しそうに熱く語られ、持っている知識を全て伝えるかのように何時間でも説明をされ質問にも丁寧に答えられていました。子ども達を見送った後には「疲れるね。」と言いながらも満足げな笑顔で事務室に戻ってこられるのでした。

先生はいつも好奇心旺盛で、とにかく少年の心を持ち続けた人でした。それは生き物に限らず自然や歴史文化、地理や雑学などすべての分野に及ぶ書籍や膨大なスクラップの数々を残されたことを見てもわかります。どんなに小さなことでも質問すれば即座に答えてくださったり、不確かなことはすぐに図書室に行き、本やスクラップを出してきてくださる先生でした。それでも植物だけは少し苦手分野だったのか、黒川に育つ草花で分からない物があればいつも写真か標本を作り「これ何か分かる？」と聞いてこられ、すぐにその場でメモをされていたのを懐かしく思い出します。

動物の珍しい行動に出くわしたと先生に報告すると、必ず「写真は？」と手を出されました。写しそびれた私に「カメラはいつも持ち歩かないとダメだよ。いつ遭遇するか分からないんだからね。」と。先生はお手製のカメラポシェットをどんな時でも持っておられましたね。

そのカメラには毎月何百枚もの画像が入っており、月の終わりにパソコンにデータを移してインデックスを作るのも私の役目でした。中には先生自身がケガをされた時の様子や、傷が癒えていく経過を何週にも渡り毎日写真に納めてあり、本当に全ての出来事が興味の対象になり記録を残すという事への執着を感じたものです。

今研究所では先生の残された調査研究データや、膨大な数の書籍やファイルなどを今後の活動に活かせるように整理しています。未来を若い方々に託された先生の遺志を繋いでいくためにも、これからもハンザキ研究所の活動を裏方で支えていきたいと思います。

先生、しっかり見ていてくださいね。

日本オオサンショウウオの会では二人三脚で司会を
奈良県宇陀大会（2015.10.3）

黒主のバトル写真が一番のお気に入りでした
（2009.8.16）

生き物好きの小さな子どもに出会った時は、
いつもとびっきりの笑顔でした（2011.9.25）

編集後記

日本ハンザキ研究所の理事、会員及び関係各位の皆様、平素より一方ならないご厚情、ご支援を頂いておりますこと厚く御礼申し上げます。

今回の「あんこう」23 号は栃本武良先生のご冥福を祈り、また今後のハンザキ研が先生の御意思を継いでいきながらも新たな決意で突き進んでいくための原点を再認識する意味を込めて、栃本先生への”追悼文特集”とさせていただきました。できるだけ多くの方々の思いを載せたいがため、400 字以内という制限を設けさせていただいたのですが、皆様の先生に対する様々な思い出やお気持ちを書きあげる上ではかなり無理があったのではないかと思っております。

そのような中、また皆様何かとご多忙のところ、多くの方々から追悼文を頂きましたこと有難く深く感謝申し上げます。

今後とも、「特定非営利活動法人　日本ハンザキ研究所」及び「あんこう」をよろしくお願い致します。

2020 年、令和 2 年が皆様にとりましても、また我々の「日本ハンザキ研究所」にとりましてもいい年になりますようお祈り申し上げます。

編集長　増子　善昭

編集長　増子善昭　／　編集　黒田真澄

令和元年 9 月 31 日　発行

特定非営利活動法人
日本ハンザキ研究所

〒679-3341
兵庫県朝来市生野町黒川 292
FAX 079-679-2939
E-mail: info@ hanzaki.net
HP: https://www.hanzaki.net